



Title	『稚枝鳩』における悪人像：『優曇華物語』との関連性をめぐって
Author(s)	池田, 真紀子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2023, 57, p. 25-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94908
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『稚枝鳩』における悪人像

——『優曇華物語』との関連性をめぐって——

池田真紀子

キーワード：曲亭馬琴／後期読本／『稚枝鳩』／悪人像

一、はじめに

文化年間初頭、山東京伝は『忠臣水滸伝前編』（寛政十一年刊）を発表することで、後期読本流行の端緒を作った。後続で参入した曲亭馬琴は、京伝の作品を模倣しつつ作品を執筆した。この時期の京伝と馬琴は交互に作品を発表しており、その作品群は趣向や物語の構造の面で、類似点が多く指摘されている。こうした二人の作家による「競合状態」は、先行研究において議論されてきた。^①

『稚枝鳩』（文化二年刊、以下『稚枝鳩』）は、曲亭馬琴による仇討物である。本作は、前述の「競合状態」の最中、後期読本の様式が形成されていく段階で執筆された馬琴の半紙本読本の第二作目であり、前年に刊行された京伝の『優曇華物語』（文化元年刊、以下『優曇華』）との影響関係が指摘される。当然、「競合状態」の一端を示す作品とし

て、前述の議論の対象となるはずであった。ところが、先行研究では同時期に京伝と馬琴が著した他の作品に比べて注目度が低く、十分な考察がなされてこなかつた。本稿では、馬琴と京伝の作品に見られる「競合状態」を踏まえて『稚枝鳩』を考察し、『優曇華』との関連性を検証する。

二、「競合状態」における『稚枝鳩』と『優曇華物語』

まず、前述の「競合状態」や、その観点から言及してきた『稚枝鳩』と『優曇華』に関する議論を整理したい。

「競合状態」と『稚枝鳩』『優曇華』の関連性に同時にふれた先行研究として、古くは小池藤五郎、後藤丹治⁽²⁾、 笹野堅⁽⁴⁾、中村幸彦⁽⁵⁾などの言及がある。それぞれの論の中で、『稚枝鳩』と『優曇華』は類似箇所が多く、馬琴と京伝の「競合状態」を示す例であるとされてきた。しかしその一方で、馬琴の前作『月水奇縁』（文化二年刊）の方が『優曇華』との類似点が多く、『稚枝鳩』以上に影響関係が色濃いという見方もなされてきた。⁽⁶⁾

これらの研究では、そうした状況を馬琴と京伝による「競争」「競作」とする見方が優勢であった。しかし、研究が進むにつれ、別の見解も生じてくる。大高洋司は「京伝、馬琴と『勸善懲惡』において、「稗史もの」読本の文藝様式は、京伝を中心に、文化三、四年頃までごく近しいところにいた馬琴（及び両者と協力関係にあつた書肆鶴屋喜右衛門）との「談合」によって形成された面が大きい」との「仮説」を示し、その根拠に作品構造・趣向の近似性を挙げる。⁽⁷⁾

大高以前の作品考察を通じた議論のほか、出版資料の側面からこの議論に言及したものもある。高木元は、『江戸読本の研究—十九世紀小説様式攷』で、「文化元年から四年にかけての刊行順序」に注目し、「京伝の『優曇華物語』

を文化元年十二月に、馬琴の『稚枝鳩』を文化二年正月に出している。この二作は、共に文化二年春の新板という意識で出されたもの」としつつ、文化三年の新板として『曙草紙』と『剽盜異録』を、文化四年の新板として『善知安方』と『梅柳新書』が同様の例に挙げる。同時に、諸作品の出版背景を整理することで、文化期初頭の馬琴と京伝の作風について、先行研究でそれまでの研究者が「感情移入」した結果、「京伝と馬琴との対立競争意識の反映として説明してきた」と批判し、「江戸読本を流行させるために板元である鶴屋喜右衛門が意図的に演出したものと考えるべき」という見方を示している。⁽⁸⁾

こうした議論を踏まえると、戦前からの研究史では、文化年間初頭の馬琴と京伝の諸作品の中で、趣向を模倣し合う・刊行時期が近いという状況が見られたため、作者同士で競い合うような意識があつたとする見方が、一様になされてきた。しかし、作品本文への詳細な検討や従来の研究史の洗い直しによって、作者同士の「競作」とされた状況は、作品の売れ行きや板元の意向に配慮した、意図的な執筆上の戦略であつたという見方に落ち着いたのである。管見の限り、この議論にさらに注目した研究は、これ以降見当たらない。

『稚枝鳩』は、京伝と馬琴が意図的な「競合状態」にあつた最中に書かれた作品でありながら、研究史上では『月水奇縁』の方が『優曇華』との類似点が多いという見方によつて、考察の必要性が軽視されてきた。以上のような内容を踏まえて、本稿では、『稚枝鳩』に対するより詳細な考察を試み、『優曇華』との関連性を改めて検討する。

三、『増補外題鑑』の記述

『稚枝鳩』の考察にあたり、作品に関する当時の認識を確認したい。『稚枝鳩』と『優曇華』との関連性については、

岡田琴秀・為永春水著『増補外題鑑』（一八三八年）に記述が見える。⁽⁹⁾

『増補外題鑑』の書誌は、鈴木圭一や横山邦治の諸論文が詳しい。⁽¹⁰⁾ それらを踏まえると、『増補外題鑑』は、文化末年に刊行した一枚刷の『出像稗史外題鑑』のほか、複数冊の既存の目録の内容を併せて編集された。各本の解説は春水が担当したとされ、特に馬琴や京伝など江戸の作者の作品を多く取り上げる傾向がある。

さて、問題の該当箇所は次の通りである。

うどんげ物語 全六冊 山東京伝作
わかねのほと
稚枝鳩

全五冊

曲亭馬琴作

右のしゆかうは其すじその両書ともにふたいろ相同じあいおなしかれどもさすがに名人めいじんの作なればならべよむときは猶興なほおきありておもしろし

⁽¹¹⁾

『増補外題鑑』本文を確認すると、同一項目として一つの枠の中に記載され、作品内容の比較がなされる例は、シリーズもので「前編」「後編」というつながりのある作品ばかりである。その例を以下に挙げる。

小桜姫 前編五卷 京伝作

小桜姫 後編五卷 琴魚作

前後ともによく揃ふておもしろし⁽¹²⁾

ばいくわりやうれつ 梅花水烈
ばいくわいりやうれつ 梅花水烈
後編 梅花春水 為永春水作 全四冊

ぜんへんはつし のちすじふねんこうへん
前編発市の後数十年後編を継て全伝となる実に水烈春水の如く解和げたり小梅が愁の眉を開き看官これにて由兵衛

ものがたり
の物語といふべし⁽¹³⁾

『稚枝鳩』と『優曇華』は、シリーズ関係にない作品同士ながら、そのような形で掲載されている。この箇所については、鈴木が「二点連記は当然新しく続編が刊行されたものを記すのが一般だが、同趣向を扱つたことで有名な『うどんげ物語』（京伝）『稚枝鳩』（馬琴）（22オ）も並べられる。」とする。⁽¹⁴⁾また、横山も「『優曇華物語』と『稚枝鳩』との同趣向の在り様とその影響関係の有無については、推測を交えながら各様に説かれて未解決のままであるが、春水は逸早くその実態に着目しているのである。残念ながら春水はその実態の内容について語ってくれない、事実知りもしなかつたであろうが、読本好きの春水の目は信じて良さそうである。」⁽¹⁵⁾とする。鈴木は『稚枝鳩』と『優曇華』の項目の特異性を指摘し、横山は春水の目線——つの作品で類似の趣向が用いられた点に影響関係を見出したことに注目している。こうした観点は、本稿で扱う内容として重要なものと考えられる。作品の比較検証によって、その点も考察してみたい。

『増補外題鑑』の『稚枝鳩』と『優曇華』の項目が異質なことは、偶然と言つてしまえばそれまでである。だが、研究史上で「競合状態」とされた作品群に位置づけられ、後年の出版資料である『増補外題鑑』で、シリーズ関係にある作品と同列に扱われた記載があることから、当時一つの作品が併記されるだけの認識が確かに存在したと考えてよいのではないか。

他方、『増補外題鑑』が増補する形となつた一枚刷の『出像碑史外題鑑』を確認すると、同一項目の枠に掲載されるのは、『増補外題鑑』と同様、同じシリーズの作品のみであった。¹⁶⁾『優曇華物語』の項では「金れい道人といへるも
の吉凶をトせしより洪水に人を助て禍をひき出す仇討物かたり」、「稚枝鳩」の項では「弁才天の御利生にて危きをの
がれ或は凶事の御告などいと面白き仇討なり」と紹介され、別々に掲載される。

『稚枝鳩』と『優曇華』の関わりに注目した先行研究は、作品考察・出版背景の二つの方向から言及したものに分けられるが、その両方の観点において、『増補外題鑑』の記述は注視されない。『増補外題鑑』における『稚枝鳩』と『優曇華』の項目の異質さが単なる偶然なのか、それとも解説を付した春水による何らかの意図——先行研究で指摘された両作の関連性を意識した内容——なのかという問題は、やはり検討する必要性があるだろう。

四、『稚枝鳩』の研究状況・作品の再検討

ここからは『稚枝鳩』のあらすじと先行研究の指摘を確認したい。¹⁷⁾以下に梗概を示す。伊豆国の湯が島村の浪人樋
縫九作は、妻と長女の息津・次女の千鳥・長男の呉松と暮らしていた。ある日、大地震が起り、九作は呉松を宿泊
先の男児綾太郎と取り違える。しばらくして、九作は雲州尼子家の家臣樋縫所太夫に依頼され、尼子家当主鍾愛の鷹
を見事に捕獲する。所太夫は九作の廉直さに感じ入り、息子の勇躬^{いさみ}と息津を婚約させ、雲州に引き取る。約十年後、
綾太郎・千鳥は夫婦となり、男子赤太郎が生まれる。九作宅で養われていた殖栗字九郎は千鳥に戯れかかり、逆恨み
で九作を殺害する。綾太郎は妻子連れ字九郎を追い、その道中に盜人として捕縛される。この間に、赤太郎は餓死
し、夫の死を耳にした千鳥も自殺する。解放された綾太郎は絶望するが、実父余綾福六^{よろぎ}・取り違えられた相手の呉松・

その妻音羽（綾太郎の妹）に再会する。福六の後妻おさめ（「専」とも）は悪僧道玄と密通し、おさめの連れ子が殖栗弾八・字九郎であった。この兄弟は素行の悪さで福六に勘当されたが、おさめ・道玄が密かに匿っていた。養父の仇討ちの旅に出た綾太郎は、弾八・字九郎に殺害される。おさめたちは福六たちの殺害も企てるが、おさめは自らが用立てた毒によつて福六とともに頓死する。雲州に来た弾八は息津に懸想し、息津の夫勇躬を冤罪で獄中死させるが、息津に仇討ちされる。一方、呉松・音羽夫妻は戦乱に遭い、音羽は旅費のために人肝屋に自らを売るが、普門品読経の功力で生還する。呉松は綾太郎夫妻の亡靈に導かれ、仇の道玄・字九郎を討つ。勇躬も密かに匿われており、生き残つた善人たちは土官先を得て、子孫が繁榮を極める。

『稚枝鳩』の先行研究は、典拠への指摘が中心となつてゐる。そのうち特に注目されるものとして、第七～九編に利用された、白話小説『石点頭』十「江都市孝婦屠身」、十二「侯官県烈女殲仇」が挙げられ、その他の箇所では他の中国・日本の先行作品の摂取が指摘される。⁽¹⁹⁾

前述した小池や筮野の論では、作品の要点が複数箇所で似てゐるとした。大高はそれを踏まえて、『稚枝鳩』第一～四編（大地震・弁財天の示現と予言）までと、『優曇華』の第一段（大洪水・金鈴道人の予言）の類似を指摘し、「両者の関係は前半部のみに止まる」とした。⁽²⁰⁾ 大高は別稿で、『稚枝鳩』や『月氷奇縁』の悪人像にも言及し、『稚枝鳩』の「仇討ちは二度行われる」という筋書きを示し、その内容として「楯縫息津→殖栗弾八」「楯縫呉松→殖栗字九郎」の関係性を挙げる。⁽²¹⁾

以上のように、先行研究では『稚枝鳩』の典拠が中心的に考察され、そこから『優曇華』との類似点や大まかな作品構造が指摘された。これは趣向の類似箇所の多さを表すものだが、作品構造や人物像への考察は部分的なものに止まり、検証が不十分である。そこで、本稿は、先行研究で典拠に関する議論は尽くされたものとして、『稚枝鳩』の

作品全体の構成や登場人物の性質に注目して検討を行う。

まず、『稚枝鳩』の作品構造について述べていきたい。この点は、大高が「仇討ちが二度行われる」と指摘した程度であり、本格的には検討されていない。しかし、前述の梗概からわかるように、作中では、仇討ちが何度も繰り返される構造になつていて⁽²²⁾。本作の登場人物は、楯縫九作・楯縫所太夫・余綏福六一家の善人たちと、おさめ・道玄・弾八・字九郎の悪人一味に分けられる。作中の善人・悪人の言動や辿る運命の対比が鮮明であり、物語はこの対比に基づいて展開していく。兄弟姉妹として扱われる息津・千鳥・綾太郎・呉松のそれぞれが仇討ちを志すも、悪人に殺害されたり、身内が死亡したり、困窮して仇討ちを諦める、もしくは仇討ちを完遂するというパターンを繰り返す。作品内部の兄弟姉妹がいるそれぞれの居場所において、「悪人の悪事・善人の受難→善人の仇討ち」が繰り返され、最終的に悪人一味は全て倒されるという筋書きになつていて⁽²³⁾。そして、この繰り返しは本作の人物像とも深く関わってくる。次説では、この点について検討する。

五、悪人の首魁・協力する悪女

『稚枝鳩』と『優曇華』に関して、前述した先行研究で注目されなかつた点として、悪人の人物像が挙げられる。『優曇華』『月水奇縁』『稚枝鳩』は、趣向の影響関係が指摘されるが、同時に悪人の性質についても、ある一定の傾向を見出すことができる。まず、『優曇華』で悪人に位置づけられるのは、主人公皎二郎の父である網干兵衛宅の近隣住民、大蛇太郎一味、貪欲の医師内海鰐庵などである。

盜賊の首魁である大蛇太郎は、作品冒頭で発生する大洪水の最中に善人網干兵衛に救出されて出家の世話を受ける

が、その後に兵衛とその妻を襲撃して殺害する。元々、近隣住民全てが悪人であり、これを天が一掃するという予言が高僧金鈴道人によつてなされていた。そのため、大蛇太郎は出自からして悪人と言える。加えて、主人公とその関係者に対する、強盗・拉致・殺人などの悪事を広く働き、金鈴道人に化けて金品を集めたことで道人本人から「仮敵」として語られる。さらに、大蛇の被り物を手下に操らせて巧妙に旅人を襲い、自身の住処を言い当てた主治医の内海鯨庵を躊躇なく切り殺すなど、冷徹で諸事に長け、作中の善人全ての仇である大悪人として描写される。

大蛇太郎のほか、とりわけ目立つ悪人は野猪婆いのしょばである。この老婆は山奥で茶屋を営む傍ら、大蛇太郎一党に協力して旅人を襲う。また、表向きは産婆業も営むが、赤子を間引いたり、金品を受け取つて預かれた幼子を殺害したりもする。こうした悪行の中で野猪婆の最大の悪事は、妊娠の殺害である。大蛇太郎の鳥目の治療のため、皎二郎の家臣の妻真袖まくらわを自宅に誘いこんで惨殺し、腹の中の赤子を取り出してしまう。後に真袖の夫健助が仇討ちを行うが、その際も「何等の奴なれば夜中狼藉やちゅうろうぜきをなすや。我を誰とかおもふ、野猪婆いのしょばとて、強氣がうきの誉高き女なるぞ。おのれ目にも見せん」と詈つゝ、菜刀ながたなをさかしまにとりて、立たつむかふ」（卷之五上）というように、健助を威嚇する強烈な印象の人物である。

大蛇太郎・野猪婆の人物像が際立つ一方で、善人たちの処遇については丁寧に伏線が回収される。皎二郎の父母網干夫妻の前世は罪人であり、本来は今生に報いがきて地獄で呵責を受け、子孫も血筋が絶える運命だつたと、金鈴道人が語る。しかし、今世の善行により「天堂てんどうに生れて、無限むげんの歡樂くわんらくをきはむ」とされ、本人たちの横死のみで、子孫の不幸が回避され末代まで繁栄を極めることが、皎二郎に説明される（卷之五下）。

また、横死した真袖は、夫の前に幽靈となつて現れ、閻王が真袖の「貞節」を憐れんだために冥界での呵責は受けず、やがては「極楽国」に送られるという（卷之五上）。

大蛇太郎や野猪婆のような生粹の悪人が登場する一方で、横死した善人の善行とその報いが漏れなく示されている点で、本作は勸善懲惡や因果応報をよく表した後期読本という評価がなされていた。⁽²⁴⁾

では、『稚枝鳩』は『優曇華』からどのような影響を受けたのか。それは、以下に検討する通り、人物像について最も大きく関連性が見られ、『優曇華』の大蛇太郎・野猪婆に相当する人物が登場している点である。

まず、大蛇太郎に相当するのは、弾八・字九郎・道玄の一味である。弾八は息津を手に入れようと勇躬に近づき（巻之四）、字九郎は九作に養われながら娘の千鳥に関係を迫る（巻之二）。二人は善人たちに取り入りつつ、その裏で悪事を画策する。道玄も表向きは僧侶であるが、おさめと密通し、毒石の窃盗や福六たちの暗殺を企てる（巻之三）。このように悪事のために身分や本心を偽り、悪人同士で組織的に悪事を繰り返す点で、『優曇華』の大蛇太郎の人物像に近似している。

「悪女」とされる人物も見ていく。「優曇華」の野猪婆に相当するのは、福六の後妻「おさめ」と、「茶挽の長」という老婆である。おさめは道玄・弾八・字九郎と結託し、夫方の親類縁者を冷遇し、やがては近隣の寺に封印された毒石で彼らの暗殺を試みる。また、逃亡中の弾八・字九郎を匿い、綾太郎の刀に膠や松脂を入れて抜けない細工をしたことで綾太郎が殺害されるなど、狡賢い人物として描かれている（巻之三）。

茶挽の長は、身を偽って逃亡していた弾八に金で買収され、弾八が夫ある身の息津と添うように水面下で画策する。息津が親戚に出した手紙を届ける使者も茶挽の長の密告によって弾八に殺害される。『優曇華』の野猪婆ほどグロテスクな所業はないが、私欲のために躊躇なく他者を陥れて害する人物である（巻之四）。

このように、おさめと茶挽の長は、明らかに『優曇華』の野猪婆に似通つており、邪悪・狡猾・貪欲といった性質をもつ。善人を騙して悪事を働く女・老婆という設定は、趣向や筋書きの一つして大きな類似点と言えよう。だが、

大蛇太郎に相当する道玄たちは、些か印象が弱い。むしろ、天才的な大悪人である大蛇太郎の要素を、分割して描いたかのように見える。

そこから一つの仮説が見出される。馬琴は『優曇華』に登場した印象深い悪人像から、『稚枝鳩』でその要素を分散させて、複数人の悪人を作り出したのではないか。そして、そのことによつて、善人がそれぞれの居場所で悪人にによる不運を被る仕掛けになつていると考えられる。『稚枝鳩』では、仇討ちを決行する善人側の人数が多く、それに合わせるために、悪人の要素と人数を分散させた。そうすることで、類似する悪事や善人の受難、そこから生じる仇討ちの話型が繰り返し描かれたと考えられるのではないか。

他方、こうした点について、『稚枝鳩』以前に『優曇華』を参照したとされる『月氷奇縁』は、どのような様相を呈しているのか。悪人像の筆頭である石見太郎は、『優曇華』の大蛇太郎との類似点が多い。そのことは大高の論で立証されており、⁽²⁵⁾ 冷徹で諸事に優れ、盜賊の親玉として作品全体を通して悪事を重ねる点で、二人の人物像は合致している。

また、『優曇華』の野猪婆に相当するのは、『月氷奇縁』では「六田慶婆」であろう。作中ではこの老女に「きもいりばゞ」と読みがふられ、仲介業を生業とする。具体的には、主人公倭文の病を治療できる薬師を紹介し、その治療費のため玉琴には妾奉公先を斡旋する。倭文と玉琴の涙の別れの直後には「五七両の辛苦錢を得て俄に得つきたりとよろこびぬ」といった様子で、夫妻の悲運を間近で目にしながら手間賃を得たことを喜び、情けよりも金に関心を向ける一面がある（巻之四）。主人公の関係者としては、悪人と捉えられそうだが、この老婆は、後に倭文の仇討ちに助力する永原家の旧臣上市丹治の息子二人を、倭文に引き合わせるキーパーソンとなる。というのも、倭文の眼病治療には、丹治の息子たちが飼う白い猿の生き胆が必要になる。その生き胆に関する交渉役を六田慶婆が担い、倭文か

ら託された代金入りの財布が、永原家の山鶴に纏わる珍しい一品だった。それを見て丹治が生き胆を求める相手方が旧主の子息であると気づき、丹治の息子二人が倭文のもとに馳せ参じるのであつた。このように、作品全体を踏まえれば、六田慶婆は仲介業に熱心な人物であり、善人側に積極的に悪事を働く描写はなく、勸善懲惡を標榜する作品様式としては、善惡のどちらにも振り分けにくい。

以上、『稚枝鳩』を中心いて『優曇華』『月氷奇縁』などの作品を比較検討した。悪人像・悪女像に共通性が多く見られ、こうした人物像の系譜を作品の刊行年次順にまとめるに以下の通りになる。

○悪人像

『優曇華』（大蛇太郎）→『月氷奇縁』（石見太郎）→『稚枝鳩』（道玄・弾八・字九郎）

○悪女像

『優曇華』（野猪婆）→『月氷奇縁』（六田慶婆）

↓
『稚枝鳩』（おさめ・茶挽の長）

これらの作品群を論じた従来の説では、男性の悪人像の印象が強いためか、悪女像を複数作品で比べることはなかつた。また、男性の悪人像にしても、先行作を引き継ぎながらそれを分散している可能性については、管見の限り、指摘はなかつたと思われる。

加えて、こうした説から『優曇華』『稚枝鳩』の作品構造を考察すると、次の図のようになる。⁽²⁶⁾

両作を比較すると、物語の展開は似ているとは言い難い。『優曇華』で最大の敵である大蛇太郎一味が討ちとられるのは結末部分である。一方で『椎枝鳩』は、場面ごとに悪人が悪事を働いて善人に受難があり、それによつて仇討ちが決行されるが、すべて成功するとは限らない。

また、両作の最大の共通点は、悪人を手助けする強烈な悪女が登場する点であろう。『月氷奇縁』の六田慶婆は、主要人物というより端役のようであるが、『優曇華』の野猪婆のように金にがめつい要素をもつていた。同時に『椎枝鳩』のおさめ・茶挽の長は、その強烈な悪女像から、『優曇華』の野猪婆の姿が継承されていることがわかる。

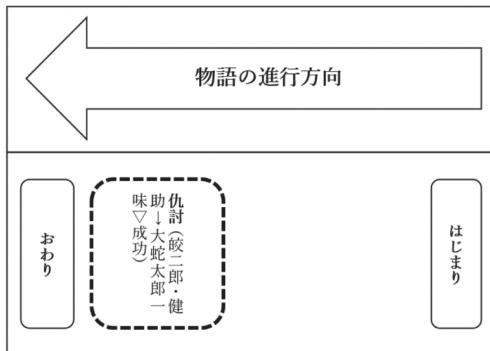


図1 『優曇華物語』の作品構造

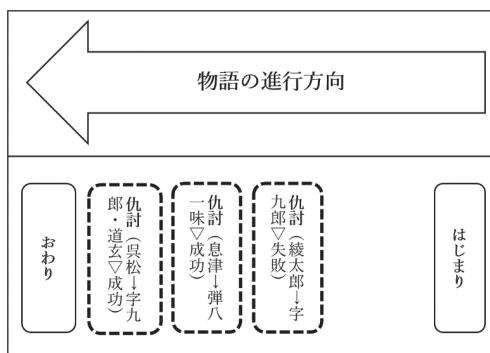


図2 『椎枝鳩』の作品構造

六、おわりに—悪人の造型と深化—

ここまで、『稚枝鳩』『優曇華』の関連性について、馬琴の前作『月氷奇縁』も含めて、作品構成や人物像に注目し、考察してきた。従来の議論から、馬琴の『月氷奇縁』と京伝の『優曇華』は類似点が多く、両者が執筆過程で互いの草稿を参照しあつていた可能性は高いだろう。しかし、その一方で軽視されてきた『稚枝鳩』と『優曇華』の関わりを検討すると、悪女の人物像については、『月氷奇縁』以上に『優曇華』に近似する可能性を指摘できた。加えて、『稚枝鳩』『優曇華』を対比することで、特に『稚枝鳩』の作品構造では、仇討ちのループによって、善人がそれぞれ悪人と対峙していき、最終的に全ての仇討ちが完了するという筋書きが見受けられることが明らかになった。

本稿の考察から、『優曇華』で示された大悪人とそれに助力する強烈な悪女という人物像は、『月氷奇縁』で石見太郎に踏襲され、六田虔婆にその片鱗が見えるかのようであった。そして、『稚枝鳩』にいたっては、作品内に善人の仇討譚を重層的に入れ込むことで、それと対になる複数の悪人が必要となり、結果的に『優曇華』の大蛇太郎・野猪婆の人物像が、『稚枝鳩』で複数人の悪人に分散される筋書きへと作り変えられたのではないだろうか。

以上のことを考へるに、『増補外題鑑』で春水が『稚枝鳩』と『優曇華』を併記して筋書きが似ていると記載したのは、大高が指摘した作品前半部の近似性に加えて、作中に見られる強烈な悪女像によるものと言えるのではないか。そして、『稚枝鳩』と『優曇華』は、作品の類似点として認められる要素が増えたため、『競合状態』を表す例として、より密接な影響関係にあると考えるべきであろう。

ただし、『増補外題鑑』の記載については、『月氷奇縁』と『稚枝鳩』を取り違えた可能性も考えられる。春水が作品を取り違えたのか、本当に『優曇華』と『稚枝鳩』が似ていると認識していたのかという点は、今回の『稚枝鳩』

の作品考察によって、その一端を確認できたのではないか。加えて、馬琴と黙老が指摘した『増補外題鑑』における春水の書きぶりに、どこまで問題があるのかという問い合わせる考察であつたと考える。

最後に、本稿では紙幅の都合上、触ることが出来なかつたが、『月氷奇縁』と『稚枝鳩』を論じるにあたつては、作者である馬琴の大坂旅行による上方の出版業界からの影響も見逃せない。今後はそうした点も含めて、考察を進めたいきたい。

〔注〕

- (1) こうした状況は、多数の先行研究で言及されてきた。研究史の流れをまとめたものとして、高木元『江戸読本の研究—十九世紀小説様式攷』が詳しい。高木は「競合状態」を「競作状況」と呼称する。この点については、大高洋司『京伝、馬琴と〈勸善懲惡〉』でも触れられており、先行研究で指摘される「競合状態」について大高自身は「談合」とする仮説を示す。後述で詳細を述べるが、本稿ではとりあえずこの状況を「競合状態」と呼称する。
- (2) 小池藤五郎『山東京伝の研究』(岩波書店、一九三五年)、四二七～四三三頁。
- (3) 後藤丹治『太平記の研究』(河出書房、一九三八年)、三六六～三八五頁。
- (4) 日本文学大辞典(増補改訂)(新潮社、一九五〇)一九五一年)、笛野堅による『優曇華物語』『復讐奇談稚枝鳩』の項目。
- (5) 中村幸彦著述集 第四巻(中央公論社、一九八七年)、四二四～四二五頁。
- (6) 「優曇華」「月氷奇縁」「稚枝鳩」は、序跋に見える執筆時期と刊行時期が前後している。この背景として、先に京伝が『優曇華』の草稿を作り、それを馬琴が参照して『月氷奇縁』を書き、それらの様式を踏襲しつつ『稚枝鳩』が書かれたとされる。これについては、後述する大高洋司『優曇華物語』と『月氷奇縁』—江戸読本形成期における京伝、馬琴が詳しい。
- (7) 大高洋司『京伝、馬琴と〈勸善懲惡〉』(『国語と国文学』九九〇巻、二〇〇六年)を参照。大高はこの「仮説」のほか、「近世

物之本江戸作者部類》（一八三三～一八三四年稿）を中心に、馬琴自身によつて「競合」のイメージが作り出されたのではと指摘する。

- (8) 高木元『江戸読本の研究—十九世紀小説様式攷』(ペリカン社、一九九五年)、四九～五九頁。
- (9) 先行研究・当時の資料によつては『補外題鑑』〔山川文庫外題鑑〕とするものもあるが、本稿では以下、『増補外題鑑』『出像稗史外題鑑』と表記する。『増補外題鑑』は、後に馬琴と木村默老による『増補稗史外題鑑批評』で、分類・作品の採用方針・批評内容が妥当でないという形で非難を受ける。本論では、作者や板元など作品製作の当事者ではなく、第三者的な見方・一読者としての目線を提示する春水の認識に注目するため、馬琴・默老による批評については、これ以上論じない。)
- (10) 鈴木圭一の諸論文は以下の通りである。「資料報告『書林文溪堂藏販目録』『東都書林文溪堂藏版中形絵入よみ本之部目録』—『増補外題鑑』成立の一過程」(広島文教女子大学研究出版委員会『読本研究』第四輯下巻(渓水社、一九九〇年))、『『増補外題鑑』の成立要因(上)—蔵販目録を土台として』(『読本研究』第八輯下巻、一九九四年)、『『増補外題鑑』の成立要因(下)—蔵販目録を土台として』(『読本研究』第九輯、一九九五年)。横山邦治の諸論文は以下の通りである。「春水の読本觀と馬琴—『増補外題鑑』を通して』(『国語と国文学』五五一一、一九七八年)や『為永春水編増補外題鑑』(和泉書院、一九八五年)の『解題』。
- (11) 横山邦治『為永春水編増補外題鑑』四五頁。以下、本稿における『増補外題鑑』本文は全てこの本の影印から引用する。また、古典作品や出版背景に関わる当時の資料を引用する場合は、旧字を新字体に改めて記載する。
- (12) 「為永春水編増補外題鑑」二二頁。
- (13) 「為永春水編増補外題鑑」四三頁。
- (14) 「増補外題鑑」の成立要因(下)—蔵販目録を土台として』、二二五頁。
- (15) 「為永春水編増補外題鑑」「解題」一六八頁。
- (16) 『出像稗史外題鑑』の該当箇所の例は、紙幅の都合上、記載を省く。本文は『為永春水編増補外題鑑』卷末の影印資料を参照した。
- (17) 本稿で参照・引用する作品本文は、『月水奇縁』『稚枝鳩』は鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成』(汲古書院、一九九

五年)第一・二巻を、『優雲華』は山東京伝著・山東京伝全集編集委員会編『山東京伝全集』第十五巻(ペリカン社、一九九四年)を用いた。また、紙幅の都合上、梗概は『稚枝鳩』のみ挙げる。残りの二作品は、本文の引用元とする書籍の解題などを参照されたい。

- (18) 作中では、戦乱の中で人間の肝を食べる迷信が生じ、肝が売り買いされるという筋書きがある。
- (19) 典拠を指摘する先行研究は複数あるが、『馬琴中編読本集成 第二巻』「解題」が詳しいため、特にこれを参考した。本稿では、『稚枝鳩』の作品構造や人物像に着目するため、典拠の詳細な考察は行わない。
- (20) 大高洋司「優雲華物語」と『曙草紙』の間――京伝と馬琴――(『読本研究』第二輯上巻、一九八八年)を参考。
- (21) 大高洋司「馬琴読本の一展開――四天王剣盜異録」とその前後――(『近世文藝』三九、一九八三年)四七〇―四八頁。ここでは、『月水奇縁』『石言遺響』『稚枝鳩』の三作の「簡単な比較を行」い、「最後の復讐に係わる人物のみ」について言及される。
- (22) 綾太郎・息津・吳松など三人の人物が仇討ちを決行しており、このうち綾太郎は、悪人らの姦計によつて返り討ちにされる形で殺害される。
- (23) 綾太郎は取り違えられた子で血のつながりはないが、作中で吳松と義兄弟の間柄となる。
- (24) 『山東京伝全集』第十五巻「解題」、五九〇頁。「解題」は徳田武による。
- (25) 大高洋司「優雲華物語」と『月水奇縁』――江戸読本形成期における京伝、馬琴――(『読本研究』初輯、一九八七年)
- (26) 図は、場面ごとに仇討をした代表的な善人を示し、悪人についても同様に表記した。

SUMMARY

The Image of the Villain in “Wakae no Hato”
 :The Relation to “Udonge Monogatari”

Makiko IKEDA

The “Wakae no hato” (1805) is a *katakiuchimono* by Kyokutei Bakin. It was written at the stage of the formation of the kōkiyomihon style at the beginning of the Bunka era (1804-1818). At this time, kōkiyomihon was popular due to the publication of Santou Kyōden's first work, “Chuushin suikoden zenpen” (1799); specifically, Bakin imitated Kyōden in writing his work. Given these circumstances, it is believed that the early Bunka period was a time when Kyōden and Bakin alternated in publishing their works.

The “state of competition” between Kyōden and Bakin has been discussed in previous studies. The influence of “Wakaye no hato” on Kyoden’s “Udonge monogatari” (1804) has been pointed out. Naturally, the connection between these two works should be considered part of the “competition” between Kyoden and Bakin. However, it has been argued that Bakin's first novel, “Geppyo Kien” (1804), is more closely related to “Udonge Monogatari” than “Wakae no Hato” is. As a result, “Wakaye no hato” has received less attention, and its relevance to “Udonge monogatari” has remained insufficiently discussed.

On the other hand, there is an important description in “Zoho Gedaikagami” (1838), a publication-related list of the time. In “Zoho Gedaikagami,” “Wakae no Hato” and “Udonge Monogatari” are listed in the same section, with a comment stating that “the two works have the same synopsis, and it is interesting to read them side by side. In contrast, “Geppyo kien” and “Udonge monogatari” are listed in completely different entries, and there is no description where the connection can be read.

This paper discusses “Wakae no Hato” and “Udonge Monogatari” in terms of their structure and the nature of their characters. By doing so, we will present a new view on the relevance of the two works, which has been neglected in previous studies, in terms of the image of the Villain.